

## 会社探訪



保命酒入りの商品の数々

「創業は明治42年。  
既に中心部ひとかにゐる」

中島商店は前述のように明治42年に初代の中島太郎が創業した。現在の中島良昭社長で3代目になる。中島社長によると、気候が温暖な備後では鶏卵業が盛んで、その関係からかお菓子屋も多かった。原料として小麦粉や砂糖の需要が多い。

その辺りが創業の背景であったようだ。当時、砂糖は貴重品。例えは悪いが、砂糖1斤(600g)はピストル1丁と同等くらいの価値があつたそうだ。砂糖の卸としては現在でも市内でトップクラスだが、そのほか、製菓原料一式や海産物なども扱っている。健康指向もあってか砂糖の需要はかつてほどではないというが、中島社長は「味、価格、物を腐らせない力など、砂糖は天然のものが一番

いい」と力説する。

明治、大正、昭和の戦前、戦後、平成と何度も移転はあったものの、一貫して福山の中心部に店を構えている。言つてみれば同社は中心部の盛衰の生き証人のような存在だ。

とんどが練り歩いた際の大勢の人出など、中島社長の記憶にも往時の賑わいの様子が残っている。去る5月21日、市を中心部のシンボルロードとして「きたはま通り」がオープンした。その記念のイベントとして、中心部を36年ぶりに高さ8mの「宝船」とんび」が練り歩いた。「懐かしい思いがした」(中島社長) そうだ。

中島社長は新しい商品の開発に取り組む姿勢を「いい事だ」と評価する。時代とともに新しいもの、皆が欲しがるものに挑戦しないとダメだといふことである。

「みんなが良くなれば地域が良くなる」

铭菓の方はいじまでは順調な歩みだ。福山の外から来た人がお土産に買っていくケースが多いようだが、例えばクワイを使つた羊羹などは、地元のクワイ農家の人が買い求めに来ることが多いそうだ。自分たちが作ったものが立派な製品になつたことを確かめるかのようだ。

中島商店の動きが刺激になつたのか、近頃では他の業者の中にも地元産品を使つた商品開発の流れが生まれつつあるように見受けれる。中島専務はこのような動きを「みんなが良くなれば、市全体が良くなる」と歓迎する。

「子どもたちが誇れる福山を作る礎に」

新たな銘菓の開発はもちろん、中島専務はさらには先を見据える。平成の大合併が一段落した現在、次は道州制への流れが強まることが予想される。中国州になるか中四国州になるのか定かではないが、福山だけでは成り立たなくなる時代となるだろう。逆にそんな時代だからこそ、福山がイニシアティブをとれる商品、福山から発信できる商品が必要ではないか。「その時が来てから動いていたのでは遅い。早めに仕掛けないと」と語る中島専務。そのためには人脈を駆使して情報をとる。福山に戻る前、東京で商社に勤務していたことがこんなところにも生きてくる。

いずれこの地から“ジャパンブランド”を出したいとの夢がある。その根底にあるのは、次代を担う子どもたちが誇れる福山にしたいという思いだ。その礎になるつもりだ。

(取材・文 大陽新聞 塩田 聰)



### (株)中島商店

- 所在地 福山市御船町1丁目13-5
- 電話 (084)922-4870
- FAX (084)925-1055
- ホームページ <http://nakataku.com/>